

「社会生活リテラシー」教育の今日的意義

野口 周一^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

筆者たちは、2007 年と 08 年において「社会生活リテラシー」という概念を「現代社会において個人として主体性を持った生き方をする能力」とであると定義づけた。このたび、筆者はそれを養うための実践的な教育活動の取り組みの実例を再び示し、ここに再度「社会生活リテラシー」教育の今日的意義を提唱する。

【キーワード】

社会生活リテラシー

はじめに

筆者は、かつて岩崎敏之・伊藤善隆両氏と、

① “社会生活リテラシー”教育の構想（『湘北紀要』第 28 号、2007 年）

② 社会生活リテラシー教育の実践（『湘北紀要』第 29 号、2008 年）

の 2 編を書き、「社会生活リテラシー」教育を提唱した。

これは、従来の所謂「知識偏重」教育を克服することを目指し、社会生活リテラシーという概念を「現代社会において個人として主体性を持った生き方をする能力」とであると定義付けたのであった。

殊に筆者が注目している点は、課外活動と「社会生活リテラシー」教育の関係である。したがって、本稿では課外活動あるいは部活動と社会性の

獲得という視点で論を進めていきたい。

1. 提唱の背景

筆者たちは、上掲①論文、第 1 章「“社会生活リテラシー”教育の必要性」において、次のように記した。

従来の、いわゆる“知識偏重”の教育を克服することは、現在の教育に関わる私たちにとっての大きな課題である。近年では、“知識”の獲得を目的とした“学習”だけでなく、獲得した知識の活用方法や、あるいは知識獲得の過程そのものを含めて“学習”と捉える見方が一般的になりつつある。

そこで、本稿では、そうした新たな“学習”について、“社会生活リテラシー”という概念を導入することを提唱する。すなわち、従来のいくつかの実践を踏まえ、短大・大学における“社会生活リテラシー”教育の重要性について問題提起を試み

<連絡先>

野口 周一 noguchi@shohoku.ac.jp

たい。

では、その新たな“学習”の目的とは何か。抽象的に言えば、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」、等々であり、具体的に言えば、「朝きちんと起きられるようにしてほしい」、「人の話を静かに聞くようにしてほしい」、「礼儀正しい態度を身につけさせてほしい」、「就学意欲や労働意欲を持たせてほしい」、などといった保護者の方々からの要望を満たし得るような“躰”や、“価値観”、“人生観”の確立、といったことまでが含まれると考えることができるだろう。

ところが、従来の常識でいえば、“躰”や、“価値観”、“人生観”、といったものは、学校の“授業”で教えられるべきものではなかった。しかし、たとえば部活動やボランティア活動などの「課外活動」において、あるいは友人や教職員との個人的な接触において、そういったことを学校で“学習”することはあった。あるいは、むしろ“授業”で覚えた“知識”よりも、そうした“授業外”で“学習”したことの方が、社会に出てから役に立ったり、思い出として記憶に残ったりしていることが多いのではないかとも思う。

とすれば、これからの社会の要求に応えるために、私たちは、そうした従来の“授業”という範疇に入らなかった要素も、積極的に“授業”の中に取り込んでゆく、ということを今後の課題にしなければならない。そこで、注目したいのが“リテラシー教育”である。

“リテラシー”という言葉は、“読み書きの能力”という意味であり、場合によっては“運用能力”と訳されることもある。たとえば、“コンピューターリテラシー”と言った場合には、コンピューターに関する知識や、コンピューターを実際に活用する能力のことを指す。また、たとえば、近年では日本の大学でも“メディアリテラシー”とい

う授業が定着しつつあるが、この“メディアリテラシー”という言葉には、画像や文字、音声などの情報を編集し発信するという側面と、発信されたメディアの情報を批判的に読み解いてゆくという側面の、両様の意味がある。

とすれば、今問題にしている「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」等々を身につける教育というのは、対社会的な“リテラシー”を身につける教育であると考えることができだろう。そこで、そういったきわめて実際的な実践的な教育を“社会生活リテラシー”と捉えてみたい。つまりは、“社会で生きていく能力”の謂である。このように捉えてみれば、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」といった、現在の社会では最も求められているにも関わらず、従来の学校教育がなかなかカリキュラムに取り組むことの難しかった要素とは、すなわち“社会生活リテラシー”であると考えることができだろう。

もちろん、たとえばパソコンの運用能力のごく基本的な要素、それに日本語、英語の実践的な運用能力なども、現代におけるもっとも基本的な“社会生活リテラシー”であると考えることができる。たんに、パソコンや日本語、英語の“知識”があるというだけでは不十分なのである。ある程度実際に“使える”ことが重要視されるのである。

すなわち、ここ何年かのうちに新たに学校で試みられている教育内容のある部分は、視点を変えてみれば、広い意味での“社会生活リテラシー”の要素を備えていることに気付くはずである。

提唱から10年、この概念は不要のものとなったのであろうか。

2. その後の研究状況

本節の標題について、このたび「部活動」をキーワードとして、次の2編に目を通した。

三本木温、高橋健太「部活動のあり方を考える」(『八戸大学紀要』第36号、2008年)

山本浩二、荒木祥一、神野賢治「学校部活動への関わりと社会性獲得との関連性に関する実証的研究」(『津山高専紀要』第52号、2010年)

以下、上掲論文を三本木他論文、山本他論文と順次略称する。

(1) 三本木他論文について

上掲③論文は、Ⅰ. 本稿の目的、Ⅱ. 部活動の位置づけ、Ⅲ. 部活動の現状と問題点(1) 生徒数の減少、(2) 教員の多忙化、(3) 部活動に対する教員と生徒の意識格差、Ⅳ. 部活動の意義について、Ⅴ. これからの部活動に期待されること(1) 体力の向上、(2) 国際競技力の向上、(3) 文化振興、Ⅵ. これからの部活動のあり方、——と構成されている。

本稿の骨子は、ⅠとⅥを一読すれば直ちに知ることができる。すなわち、Ⅰにおいて「主として中学校、高等学校における部活動について、学校教育課程における位置づけ、現状と問題点を整理して、今後の部活動の望ましいあり方について考察することを目的とする」と述べる。

その問題提起をうけて、Ⅵにおいて「学校部活動は、教育課程における位置づけがあいまいであるにもかかわらず、その教育的効果は高く、社会的な期待は大きい」と部活動の意義付けがなされる。「しかし、少子化・生徒数減少、学校教員の多忙化、高齢化あるいは学校に対するクレームの増加、あるいは部活動に対する指導者と生徒の意識の乖離などによって、部活動の維持が困難となっている現状があり、これらに対する行政や学校の

対応は始まったばかりである」と続く。

ここでは「部活動に対する指導者と生徒の意識の乖離」について、Ⅲの(3)により補足すると、指導者は「心身の鍛錬、社会性集団行動の訓練、生徒指導・しつけ、学校生活の充実、生徒とのコミュニケーション、体力・技術の向上、学校の活性化」、「チームの和といった帰属感、スポーツの魅力を知る、体力・技術の向上」といった要因を挙げている。一方スポーツ少年団団員は「参加動機は楽しむため、勝つため、体力や健康のため」と、運動部と民間スポーツクラブに両属している高校生は、部活動に対して「集团的、形式的、古くさい、ヘビー(重い)、上下関係が強い、高圧的」とそれぞれ答えている。

最後にⅥは結論として、まず「上述した問題点を解決することができ、かつ、より効果的な部活動のあるべき姿を提示することは現時点では困難であるが」とする。これは現時点のみならず将来においても、完璧な解決及び提示は無理なことを理解するべきである。

続いて「部活動の基本的あり方について」として、「①地域と連携しながら、勝利至上主義にのみ捉われない、多様な目的を持った生徒の受け皿となるような体制とすること。②部活動の運営にあたっては、法令順守、意思決定の透明性確保に特に注意し、それらの情報については関係者に対して積極的に開示すること。③部活動の運営は、顧問に任せきりにするのではなく、地域住民などによる外部講師などを活用するなど、学校を中核としたグループを形成して学校全体で進める体制を構築すること」と提言する。①と②の項目はその通りであり、③については「学校を中核としたグループ」を形成し、「学校全体で進める体制を構築すること」は強調しなくてはならないことであるものの、顧問及び外部講師の指導理念は絶えず問い続けねばならないものと筆者は考える。

(2) 山本他論文について

本論文の構成は、1. 緒言、2. 学校部活動によせられた「期待」と「不安」、3. 研究目的、4. 研究方法、5. 研究と考察、6. まとめ、からなっている。

1において、「本学における運動部には約49%（約800人中390人）が所属しており、全国の高等学校運動部所属者（約37.4%）と比べてもやや上回った所属率であると言える」（『平成16年度文部科学白書』）、「また、文化部においても約18%（約140人）が所属しており、全体として約67%（530人）が部活動に所属している」と生徒の部活動参加率が示されている。

2においては、運動部活動における体格・体力の向上のほかに、運動・スポーツ活動が子どもの社会力形成に優位な影響が及ぼすことが明確にされたことが述べられる。しかし、勝利至上主義の弊害が例示され、喫緊の課題であるとされる。

3と4において研究目的と方法が示され、5において『『社会性測定尺度』の解釈』、「学年及び部活動と社会性獲得状況の関連性」、「部活動が高等学校期の前向きな意識・態度形成にもたらす影響力」が述べられ、「技術指導のみに特化しない部活動指導、つまり“社会性獲得への導き”を施すことは、子ども（学生）の学校生活をより豊かにする可能性を有していることが示唆される」、「また、このことは、これまで教科の違い（体育・スポーツの専門性を有していないこと）から部活動指導に“拒否反応”を抱かざるを得なかった教員においても、部活動指導を担う意義として再確認することができる」と結論付けている。この指摘は重要なことではあるが、筆者には容易に導きうるやや安直な回答と思われる。

3. 課外活動と「社会生活リテラシー」の関係

次に、筆者たちは①論文の第2章「課外活動と“社会生活リテラシー”教育」において、以下のよう

に述べた。

では、つぎに“社会生活リテラシー”教育の本質的な目標を、「課外活動」（部活動）と比較しながら考えてみたい。なぜ、「課外活動」（部活動）を比較の対象とするかといえば、先にも述べたとおり、従来の学校教育の中の「課外活動」（部活動）とは、“授業”のように“履修”する義務は課せられていないものである。そうであるにも関わらず、学校生活の中で非常に重要視されてきた。すなわち、“授業”では期待できない“教育効果”を発揮するシステムとして、「課外活動」（部活動）は確実に機能してきたのである。とすれば、従来の“授業”には期待できなかった教育効果とは何であるのか、そのことを確認するために「課外活動」（部活動）を例に取ってみたいのである。

そもそも、「課外活動」（部活動）の目標とは、本来的にはそれぞれの「課外活動」（部活動）で取り組んでいる活動の“成果”を出すことである。運動部にせよ、学芸部にせよ、それぞれの参加する大会、演奏会、あるいは展示会、発表会などで、なるべく高い成績や記録、評価を獲得することを目指して活動する。活動する主体である生徒・学生にとっての「課外活動」の価値とは、当然ながら活動の内容そのものである。野球部ならば野球をすることが、吹奏楽部ならば演奏することが、新聞部ならば新聞を作ることが、活動の内容である。参加する生徒・学生は、その活動内容に興味があったり、好きであったり、魅力を感じていたりすることが前提となる。

しかし、じつは一方で、「課外活動」（部活動）において重要視されるべきは、その“成果”だけで

はない。むしろ、「課外活動」(部活動)の教育的価値は、その活動の“過程”そのものにも求めることができる。たとえば、毎年、夏の甲子園大会で優勝する高校は一校のみであるが、だからといって、その優勝校以外の全国の野球部の活動が無価値であったということにはならない。また、興味深いことに、たとえ優勝したチームに所属していたからといって、必ずしも全員が野球を職業として選択するわけでもない。部活を通して鍛え育んだ技術なり能力なりが、自分の将来のキャリアに直接役立つということは、まずない。そうであるのに、部活動が重んじられるのは、記録や技術の向上という目標に向かって、工夫し頑張ったその体験・経験こそが、その後の人生においては重要な知見となると考えられているからである。

ここで注目すべきは、そうした工夫や努力をするにあたっては、“自分”が周囲とどのような関係にあるのか、すなわち“自分”と自分以外の人々＝“社会”との関係性が、いつも問題になるということである。たとえば、小さなチームであっても、その小さな“社会”の中での自分の位置付けがどうであるのか、という問題がある。また、全国のトップレベルの記録や成績と、自分の記録や成績がどれだけ開いているのか、という問題もある。そうしたことを常に意識しながら活動を行う。そのことが、その生徒や学生の人格を陶冶し、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」、となると考えることができる。

ただし、「課外活動」(部活動)の価値観でいえば、あくまでも活動中は“成果”をあげることが目標である。これに対して、“授業”としての“社会生活リテラシー”では、自分と自分以外の人々＝“社会”との関係性を意識したり、考えたり、構築したりすることを重要視する。逆に言えば、“社会生活リテラシー”とは、この“他者との関係性”を意識してカリキュラム化される必要がある。そのこ

とによって、従来の“知識”重視型の授業にくらべ、授業内容に“現実感”を持たせることも可能になるだろう。そして、そのことは、短大・大学の授業としてカリキュラムに載せた場合、履修者の勉学意欲を大いに引き出す筈である。

以上により、社会生活リテラシー教育と課外活動との関係をご理解いただけたものと思う。

4. 「社会生活リテラシー」教育の展開

ここで、筆者のささやかな体験を再掲しておきたい。

筆者らは、社会生活リテラシーという概念を、“社会人基礎力を支える根本となる個人と社会の関係性を自ら認識し、主体的に生きる基盤を形成していく能力”として捉えている。この能力を磨いていくプログラムとして重要なものの一つに、課外活動がある。今後、教育産業に関わる者は、課外活動の利用を大いに考慮し、それを進めていくためのファシリテーターとしての役割の重要性を理解したうえで、教育プログラムや教育環境をつくり上げていく必要があると考えられる。では、大学におけるクラブ活動指導の要諦は、どのようなものだと考えたらいいであろうか。

たとえば、『毎日新聞』のスポーツ欄は、2007年11月27日から「アスリート争奪」という連載の「第6部・大学」編を始めた。そこでは、まず「早稲田『全国展開』」(11月27日付)として「ここ数年、ラグビー、野球など大学スポーツ界で圧倒的な存在感を示す早稲田」が紹介されている。要は「今年度の一般入試の志願者数は約12万6000人(定員5665人)。定員は微減を続けているのに昨年より約1万5000人、一昨年より2万人近く増えている。学部の新設・再編を進めているためスポーツ

効果とは断言できないが、興味深い数字だ」(「早稲田『独り勝ち』」、11月28日付)ということに尽きる。

この早稲田大学に続けといわんばかりに、いわゆる大手の大学が同じような路線を歩んでいる。一例を挙げよう。東の早稲田大学に対して、西の同志社大学は広報誌に「課外活動は今 一学生の課外活動と大学学生支援センターの役割—」という特集を組み、「同志社大学には現在、170を超える課外活動公認団体があり、8000人を超える学生が所属している。勝利という目標を見据え日々鍛錬する体育系、感性を磨き創造性を養う文科系。大学創立当時から活動する伝統のあるクラブもあれば、トレンドを反映したサークルもある」と紹介する。ここまでは一般的な大学の活動紹介である。しかし、「その中から全国レベルの高い実力を持つクラブをピックアップ、その特徴や活動状況を紹介する」とあるように、ここでも狙いは広報なのである(『同志社大学通信』151号、同志社大学企画部広報課、2007年6月、参照)。

さて、一般的な大学・短期大学のクラブ活動の意義はどのように考えていったらよいのであろうか。幸いなことに、筆者には教養系女子短大でソフトボール部を立ち上げ、大学選手権大会(インターカレッジ、略称インカレ)に出場するまでになった、という体験がある。インカレ出場の意義を論じることはさておき、その間の経緯と感想を少し述べていきたい。

まず、筆者の思いとしては「短大生活はややもすると授業とアルバイトで、あっという間に2年間で過ぎてしまいがちだ。そうしたなかで、サークル活動を活発に進めていかないと、学生生活そのものの意味が薄れてしまうのではないか」という危機感があった。

まず、創部当初、「中学や高校のような練習はしたくない」という学生の声がよく耳に入ってきた。

そのとき、まず「中学や高校時代の部活動が良い思い出になっていない」と感じ、ついで「部活動の強制」「指導者の価値観」ということを連想した。「部活動の強制」からは「部活動が楽しくない」、「指導者の価値観」からは「指導者は部活動に何を求めているのか」という問題に帰納できると考える。

従って、筆者は当初「不定期練習で良いから」という姿勢で臨み、学生が「週1回の練習」を自主的に始めるのに5年の歳月を要した。そのときの学生の資質にもよるが、筆者が工夫した点としては、年間大小4つの大会(市県、関東、東日本レベル)への参加を目標としたこと、教職員チームを作り、新入部員歓迎試合や忘年試合などを行い、その打ち上げに教職員も参加したことなどであった。

その当時の学生の感想が残っている。「運動系クラブでは練習に部員をまとめていく苦労があると思うが?」の問いかけには「弱いチームでも大きな大会に出ることは、それだけ練習を積み重ねなければならないので、良い面を引き出すのに役立つ」、「サークル活動の楽しさは?」には「ソフトボールで培った連帯感が私たちにはあるので、どこへ行っても楽しく遊べる」「練習試合や公式試合の度に打ち上げがあるが、先生方が参加されるので、日ごろ知らない先生とも知り合いになって楽しい」、「短大生にとってサークルとは何か?」には「大会に出たり、試合に勝つことも大事だが、いろいろなコースの人たちと知り合えることも大切だ」、「短大でひとつでもこれをやったといえるものを作る必要がある」という談話が寄せられた(『ぶどうの木』第1号、新島学園女子短期大学学生委員会、1994年)。

その後、練習は週1日から2日へ、3日へ、そして最後は6日となった。ただし、練習日が週2日になった時点で、高校から有力選手がたまたま入学し、チームも関東レベルで頭角を現し始めるとい

う相乗効果があり、「短大でソフトボールを続けたい」という強い意欲をもつ学生が入学するにいたるといふ事情があった。

しかし、部活動の原点は、先に述べたように「部活動は楽しい」ことが要件であり、それに密接に関ることとして「指導者は部活動に何を求めるか」というさらに重要な問題が存在することにあると考えている。

さて、創部8年目にインカレ関東地区予選を突破して、全国大会に初出場した。その翌年のことである。埼玉県内のとある私立高校に練習試合に行った折、そこに来合わせていた公立中学校の監督が「部活衰退の時代に、このように楽しくプレーする学生たちがいるのだろうか」と驚かれて、筆者に中学生の指導を学生にしてもらいたいという依頼をされたのである。

その中学生からのお便りが残っているので、二例ほどご紹介したい。「先日は大変お世話になりました。私は、あまりチェンジアップが得意ではありません。でも、HさんやYさんに、チェンジアップ上手だね、コントロールがつくと有効だよといわれ、自信ができました」、「こんにちは！ 1年生のSです。このあいだはお世話になりました。教えてもらったことをノートにまとめ、よく見ながらがんばっています。私は、おねえさんたちがソフトをやっているのを見て、かっこいいな、自分もおねえさんたちみたいにうまくなりたいな、と思いました。これからどんどん練習して、うまくなりたいな、と思います。また、教えてもらう機会があったらよろしくお願いします」――。

筆者は、以上の活動を総括して「部活指導にあたる者として、ソフトボール部が全国大会に出場できる力を身につけてきたことは大きな喜びであります。それと同時に、部員たちが後輩たちのお世話をいとわずにできるということをさらに喜びたいと考えております」と記したのである（『ぶど

うの木』第10号、新島学園女子短期大学学生委員会、1998年）。

その後、筆者は、平成13年度から5年間にわたって、関東地区の秋季リーグ戦を主管した。これは毎年5月に開催されるインカレ関東地区予選会のシード権（第1から第4シード）を決める公式大会であり、その目標とするところは関東地区の大学ソフトボールの活性化であった。

大会を運営することは、さまざまな課題をひとつひとつ解決していかなければならないことである。まず県・市ソフトボール協会の協力を要請し、審判員・記録員の派遣などをもとめたり、開催地の市長・教育委員会・体育協会への挨拶、ボールメーカーへの協賛依頼などという対外折衝は筆者が行なった。

その他にも、大会要項の作成、大会参加の受付、宿舍の依頼と手配、組み合わせの原案作成、代表者会議と組み合わせ抽選の準備、昼食弁当の手配、練習会場と試合会場（4面）の設営、大会プログラムの作成、表彰状の用意、開会式・閉会式の準備と来賓の挨拶、大会結果の地元新聞社への送信など、その仕事は枚挙に暇がなかった。さらには天候も気になるところで、案の定、大会1年目は台風の襲来で河川敷の会場が冠水し、会場を移動し、新たに設営するハプニングがあった。

当然のことながら、上記の形形色々の仕事を筆者ひとりで行なうことは不可能である。誰が筆者とともに大会運営をするのか、それは学生たちである。その学生たちが大会運営に関することで何を学んだかは、遺憾ながら記録に残す機会がなかった。

しかし、学生たちが学んだことを推察することは容易である。それは、まさに「社会生活リテラシー」教育に相応するものであったと考えるのである。

そして、「まとめ」として、次のように述べたのである。

先に触れたように、ともすれば大学の部活動は（とくに学校を管理監督する立場の大人にとっては）広報活動の材料としての側面が意識されがちである。しかし、そもそもは「社会生活リテラシー」を養う場として非常に有効な機会であると言える。

その一例として、ソフトボールの事例を記した。本誌前号掲載（本稿における①論文—引用者註）の論文に指摘したとおり、たしかに、ソフトボール部に参加した学生たちにとって、部活動の目的は“ソフトボールそのもの”（技術の向上・試合成績の向上）であったはずだ。先にふれた中学生の感想からも、そのことはうかがわれよう。しかし、卒業して社会に出てからも、部活に参加した学生（生徒）たちに“経験”として残る要素とは、まさに「社会生活リテラシー」教育の目的に適った要素ではないだろうか。とすれば、大学・短大における部活指導の要諦は、技術・成績向上の裏側に、“いかに社会的体験を積ませるか”という点に意を用いることにあるとして良いのではないだろうか。大学・短大における部活・サークルの在り方と、昨今提唱される「社会人基礎力」との接点は、以上述べたような「社会生活リテラシーの涵養」という点からあらためて考察されるべきであると主張したい。

おわりに

先の山本他論文の「まとめ」において、本研究において得られた知見として、「1）社会性項目の得点は、部活動所属、非所属に関わらず、5年生が高い。また、社会性因子別に見ていくと、『5年生の部活動所属者』がすべてにおいて最高得点で

ある。2）学校行事への参加において、部活動所属者のほうが非所属者よりも大いに意欲的である。社会性項目の平均値においても顕著に有意差がみられた」としている。この高等工業専門学校の5年生は、筆者の指導した短期大学2年生と年齢的にはかさなるわけである。

筆者たちの提唱した「社会生活リテラシー」教育の意義は、まさに「社会性」のみならず、さらに広範な概念である。ここに、それを再提唱する意義があるわけである。

なお、本稿を草するにあたり、山口満編著『新版 特別活動と人間形成』（学文社、2001年）等を参考にしてきたが、それらを本稿では文字化することはなかったことを、お断りしておきたい。

Today's Significance of “Social Relation Literacy” Education

Shuichi NOGUCHI

[abstract]

We proposed the concept of “social relation literacy” in 2007 and 2008. We defined it as one's ability to behave independently in modern society as an individual. This paper reports some practices of educational activities in which students can develop social relation literacy and proposes today's significance of social relation literacy education.

[key words]

Social Relation Literacy